ポリオ鑑別診断調査方法

1. 目　的

ポリオの鑑別疾患と診断された患者の中に、ポリオが紛れ込んでいないことの確認を目的とします。

2. 対象鑑別疾患

①ギランバレー症候群　②横断性脊髄炎、の 2 疾患を主な対象としますがその他ポリオとの鑑別診断として重要であると思われる急性弛緩性麻痺（病原ウィルスが特定されていない急性ウィルス性筋炎・けいれん後麻痺-Todd 麻痺-など）も含みます。

3. 方　法

(1) 調査方法

上記疾患を対象として、観測定点による調査をお願い致します。

(2) 事前調査

調査対象医療機関小児科に、平成 11 年 1 月 1 日-同年 12 月 31 日に入院した（平成 11 年以前に入院し平成 11 年には引き続き入院中であった患者を含む）上記対象疾患患者数を把握することを目的とします。2 月末日迄に同封の封筒にて御返送下さいます様お願い申し上げます。尚、該当する症例が無い場合は「なし」と記入して御返送下さい。

(3) 届　　出

平成 12 年 1 月 1 日以降、上記対象疾患を診断した医療機関は、調査担当地域分担研究者・担当地方衛生検査所に別添の FAX 用紙に必要事項をお書き頂き至急御報告下さいます様お願い申し上げます。同時に下記の要項で検体の採取をお願い申し上げます。

検体の採取　　対象患者の糞便約5gを、発症から出来るだけ早い時期（14日以内）に、採取します。最初の採取から一両日以内に、2回目の便を同様に採取します。ウイルスの分離率は、1回の便からでは60%程度であるため、2検体の検査がどうしても必要です。

検体の保存　　衛研の担当者が訪問致します。それ迄の間、検体は氷冷（氷詰めもしくは冷蔵庫内）して下さい。

検査　　届けられた検体は、地方衛生検査所にてポリオウイルスの分離培養を行い陰性であることを確認するとともに、その他の考えられる原因検査を行ないます。検査の結果は、地方衛生検査所から検体提出医療機関・地域分担研究者及び国立感染症研究所に連絡されます。

(4) 解　析

結果は、地域分担研究者が集計を行ないそれぞれの担当地域について解析を行います。

その結果を委員会で検討致します。

以上、何卒宜しく御協力をたまわります様お願い申し上げます。

わが国におけるポリオ根絶のための小児急性弛緩性麻痺
サーベイランス体制の確立・研究班

横浜地域分担研究者
加藤　達夫
聖ﾏﾘｱﾝﾅ医科大学横浜市西部病院　小児科
〒241-0811　横浜市旭区矢指町 1197-1
TEL 045-366-1111　Fax 045-366-1190

ウィルス分離担当
野口　有三
横浜市衛生研究所検査研究課 ｳｨﾙｽ室
〒235-0012　横浜市磯子区滝頭 1-2-17
TEL 045-754-9804　Fax 045-754-2210

＜資料４＞

FAX送信表

送信先　横浜市衛生研究所 検査研究課　ウィルス室 野口　有三	FAX番号　045-754-2210 （TEL番号　045-754-9804）

ポリオ鑑別疾患患者発生届（平成12年）（前方視的調査）

報告機関	機関名	
	住所	
	TEL	
	FAX	
	担当者	
患者情報	患者イニシャル	
	年　齢	歳　　月
	性	男　　女
	発症年月日	平成12年　　月　　日
	入院年月日	平成12年　　月　　日
検体情報	第1回便採取日	平成12年　　月　　日 ー　　℃保存　未採取
	第2回便採取日	平成12年　　月　　日 ー　　℃保存　未採取
	その他の検体	なし　あり　（髄液・その他　　）
備考		

症例がありましたら、至急上記送信先にFAXをお願い致します。

厚生省　新興・再興感染症研究事業
「我が国におけるポリオ根絶のための小児急性弛緩性麻痺（AFP）サーベイランスの体制の確立」研究班

―平成11年度　報告書―

主任研究者：宮村 達男
分担研究者：神谷 齊（国立療養所三重病院　院長）
研究協力者：中野 貫司（国立療養所三重病院　小児科）

背景と目的

“野生株ポリオウイルスの地球上からの消滅”を目標とする世界保健機構（World Health Organization, WHO）の「ポリオ根絶計画」は着実にその成果を結びつつある。南北アメリカ大陸では1991年8月のペルーにおける患者を最後に根絶が達成され世界の各地域で積極的な根絶計画が展開されているが、西暦2000年という当初設定された目標の期日を目前に控え、インド、バングラデシュ、アフリカ大陸など未だ多くのポリオ患者を抱え今後の重点的な対策が必要とされる地域も残されている。

日本がその一員であるWHO西太平洋地域（Western Pacific Region, WPR）においては、国をあげてのポリオワクチン一斉投与日（National Immunization Days, NIDs）の設定、サーベイランスシステムの整備などポリオ対策の努力が実り、患者数は年々減少し、根絶の達成も間近と考えられている。

我が国においては、1960年代前半のポリオ大流行に際してはワクチンの一斉投与は絶大な効果をあげ患者数を短期間のうちにコントロールすることができた。その後、経済発展に伴う衛生環境の向上と厚生福利制度の充実、ポリオ定期予防接種の高い接種率を背景にポリオ患者は皆無となり、野生株による麻痺患者の最終報告例は1980年の1型である。しかし、日本では諸外国におけるポリオ対策の柱を成す急性弛緩性麻痺（Acute Flaccid Paralysis, AFP）サーベイランス、すなわち疑診例まで広く含めた患者報告制度とその患者の便からのウイルス分離による確定診断の徹底という患者発生監視制度が機能してきたわけではなかった。

現在、本当に野生株ポリオウイルスによる麻痺患者は発生していないのか。すなわち“日本におけるポリオ根絶の証明”を国際的水準に則って明確に行うことを目的として、「我が国におけるポリオ根絶のための小児急性弛緩性麻痺（AFP）サーベイランスの体制の確立」研究班が発足した。本研究班によるAFPサーベイランスは2つに分けられ、ひとつは1998年のAFP患者発生状況に関する事前調査（回顧的調査）、もうひとつは1999年（平成11年）1月以降のAFP患者発生の届出と便検体の検索（前方視的調査）である。本報告書では、三重県における1999年1月から2000年3月までのAFP患者の発生と便検体の検索状況すなわち前方視的調査の結果を報告する。

疫学的事項

三重県は日本中部の太平洋側に位置し、愛知県、岐阜県、滋賀県、京都府、奈良県、和歌山県と県境を接する。1998年10月1日現在の三重県総人口は

1,861,685人であり、うち15歳未満人口は293,099人であった。

対象と方法

対象疾患：15歳以下のポリオとの鑑別を要する疾患、具体的にはギランバレー症候群（Guillain-Barre syndrome, GBS）、脊髄炎、その他原因不明の急性弛緩性麻痺の患者を対象とした。調査票の様式を別紙に示した（「ポリオ鑑別疾患患者発生届（平成11年）」、資料1）。

対象医療機関と調査時期：三重県内で小児科入院病床を有する26病院と県境を越えてしばしば三重県在住の患者が受診する愛知県と和歌山県のそれぞれ1病院、合計28病院（図1）に対して、当該患者の発生に際しては上記の「ポリオ鑑別疾患患者発生届（平成11年）」による届出を、三重県健康福祉部を通じて依頼した。調査機関は1999年1月－2000年3月とした。

さらに、サーベイランスの質を高めるために合計3回のアクティブサーベイランス（第1回目は電話、第2、3回目はFaxによる（資料2）事務局からの患者発生有無の確認問い合わせ）も併せて行った。

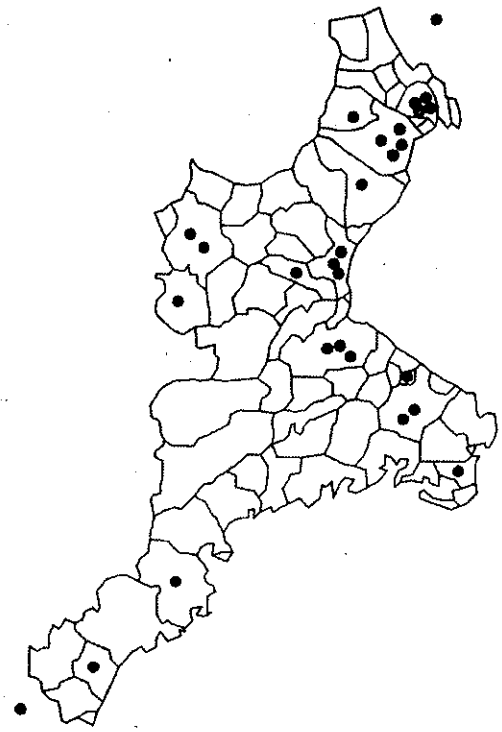

図1. 対象医療機関

結果

Ⅰ. 1999年1月－2000年3月の急性弛緩性麻痺症例届出状況（前方視的調査）

サーベイランス対象である三重県内26病院、隣接県境に位置し三重県在住の麻痺患者が受診する可能性のある2病院（愛知県1、和歌山県1）の計28総合病院小児科からの届出患者数は、病院から報告があった症例数はゼロであった。

4月中旬に行った第2回アクティブサーベイランスで、報告もれ症例1例が発見された。

Ⅱ. 1999年に施行した3回のアクティブサーベイランスについて

1. 第1回アクティブサーベイランス（1999年2月下旬、電話による）
   - 1998年急性弛緩性麻痺（Acute Flaccid Paralysis, AFP）症例の事前調査報告が届かなかった20施設に対してのみ事前調査の確認を兼ねて行った。
   - 6/20施設（30%）：担当者と連絡がとれず。
   - 14/20施設（70%）：AFP症例は1例も無し。
2. 第2回アクティブサーベイランス（1999年4月中旬、FAXによる）
   - 全28施設に対して行った。
   - 当日に返答有り；20施設（71.4%）、翌日に返答有り；2施設（7.1%）、翌々日以降に返答有り；4施設（14.3%）、返答未着；2施設（7.1%）
   - 1例の未報告例が発見された。
     ～調査担当者の交代があり、未報告のまま放置されていた。
3. 第3回アクティブサーベイランス（1999年7月中上旬、FAXによる）
   - 全28施設に対して行った。
   - 当日に返答有り；10施設（35.7%）、翌日に返答有り；8施設（28.6%）、翌々日以降に返答有り；8施設（28.6%）、返答未着；2施設（7.1%）
   - AFP症例は1例も無かった。

Ⅲ. 第２回アクティブサーベイランスに際して発見されたAFP症例について

- 年度末に調査担当者の交代があったこともあり、未報告のまま放置されていた。
- 3歳5ケ月男児。平成11年2月15日発症。ポリオワクチン歴：2回あり。
- 発症後5ケ月の時点で麻痺の残存はなく回復している。
- 最終臨床診断：ギランバレー症候群（GBS）
- 3月3日採取の髄液よりポリオウイルス分離を試みたところ陰性であった。

考察

1. 1999年の三重県におけるAFP報告率は、15歳未満人口10万人当たり0.34であった。アクティブサーベイランスにより発見されたGBS 1例のみであり、便検体は採取されていない。髄液からのポリオウイルス分離は陰性であった。
2. AFPサーベイランス制度の充実のためには、零報告の確認を含めたアクティブサーベイランスが重要と考えられた。

＜資料１＞

FAX 送信票

送信先　国立療養所三重病院小児科 中野貴司	FAX 番号　059-232-7922 TEL 番号　059-232-2531

ポリオ鑑別疾患患者発生届（平成 11 年）

報告機関	機関名	
	住所	
	TEL	
	FAX	
	担当者	
患者情報	患者イニシャル	
	年　齢	歳　月
	性	男・女
	発症年月日	平成 11 年　月　日
	入院年月日	平成 11 年　月　日
検体情報	第１回便採取日	平成 11 年　月　日 － ℃保存　未採取
	第２回便採取日	平成 11 年　月　日 － ℃保存　未採取
	その他の検体	なし　あり（髄液・その他　）
備考		

＜資料２＞

＿＿＿＿＿＿病院　小児科部（医）長　先生　御机下

厚生省「我が国におけるポリオ根絶のための
小児AFPサーベイランスの体制の確立」研究班員
国立療養所三重病院院長　神谷齊

厚生省がWHOに協力して実施しております「我が国におけるポリオ根絶のための小児AFPサーベイランスの体制の確立」研究事業にご協力賜り、誠にありがとうございます。

さて、平成11年1月8日付・健対第4240号にてご連絡申し上げましたように、患者発生が'零'である確認（アクテイブサーベイランス）を行います。平成11年1月1日から4月19日現在までの時点における下記の項目につきまして調査させて頂きます。ご多忙な折にお手数おかけいたしますが、当県は全県調査を指示されておりますのでご協力をお願いいたします。

本用紙を用いて折り返しFAXにてご返事頂きますよう、宜しくお願い申し上げます。

――――――――――――――――（ご回答用紙）――――――――――――――――

＿＿＿＿＿＿＿＿病院

調査項目：貴院に、平成11年1月1日～同年4月19日に入院した下記疾患の患者数。

対象疾患：

①ポリオ患者（ポリオ生ワクチン関連麻痺症例を含む）
②ギランバレー症候群
③横断性脊髄炎
④その他ポリオとの鑑別が必要となる原因不明の急性弛緩性麻痺

（　）対象症例有り　→　（　）例
（　）対象症例無し

Fax送付先：059-232-7922（国立療養所三重病院小児科　中野貴司）

厚生省　新興・再興感染症研究事業
「我が国におけるポリオ根絶のための小児急性弛緩性麻痺（AFP）サーベイランスの体制の確立」研究班

―平成11年度　報告書（平成13年1月12日）―

主任研究者：宮村 達男
分担研究者：岡田 伸太郎（大阪大学大学院医学系研究科生体統合医学専攻小児発達医学講座）
研究協力者：勢戸 祥介（大阪市環境科学研究所）
多屋 馨子（大阪大学大学院医学系研究科生体統合医学専攻小児発達医学講座）

目的

「西暦2000年までにポリオを世界中から根絶する」WHOの目標達成のため、WHOの要請により、日本ポリオ根絶委員会が設置され、我が国のポリオ根絶の証明のために二つの作業が計画された。すなわち、「国内ポリオ症例ゼロの確認」と「ポリオの鑑別診断例の中にポリオが紛れ込んでいないことの証明」である。私たちに課せられたこのたびの研究の目的は、後者、すなわち、「ポリオ鑑別診断調査」を大阪大学大学院医学系研究科生体統合医学専攻小児発達医学講座（大阪大学医学部小児科）及び関連病院入院症例について行うことである。

疫学的背景

大阪大学医学部小児科関連病院は、大阪府及び兵庫県に存在する。平成10年10月1日現在の大阪府の推計人口は8,557,000人であり、年少人口（0～14歳人口）は1,290,000人であった。（大阪府庁：平成7年10月1日国勢調査よりの推計）大阪府下で関連病院が存在する市は、大阪市、吹田市、箕面市、豊中市、池田市、堺市、和泉市、富田林市、河内長野市、松原市、羽曳野市、柏原市、枚方市、泉佐野市の14市であり、14市の人口は平成10年度5,469,293人、年少人口（0～14歳人口）は778,544人であった。（各市役所：平成10年10月1日現在住民台帳調査、大阪市のみ平成11年3月31日現在住民台帳調査）

兵庫県に関しては、平成10年10月1日現在の兵庫県の推計人口は5,461,000人であり、年少人口（0～14歳人口）は839,000人であった。（兵庫県庁：平成7年10月1日国勢調査よりの推計）関連病院が存在するのは、尼崎市、伊丹市、芦屋市、西宮市の4市であり（平成11年から1病院【宝塚市】増加し5市）、4市の人口は平成10年1,167,598人、年少人口（0～14歳人口）は166,096人であった。（各市役所：平成10年10月1日現在住民台帳調査）（表1）

次に、平成11年10月1日現在、大阪府下で関連病院が存在する14市の人口は5,464,287人、年少人口（0～14歳人口）は774,768人であった。（各市役所：平成11年10月1日現在住民台帳調査、大阪市のみ平成11年3月31日現在住民台帳調査）

一方、兵庫県に関しては平成11年10月1日現在、関連病院が存在する尼崎市、伊丹市、芦屋市、西宮市、宝塚市の5市の人口は1,377,225人、年少人口（0～14歳人口）は198,735人であった。（各市役所：平成11年10月1日現在住民台帳調査）（表2）

表1.

大阪府及び兵庫県に関しては推計資料。
その他の市については、住民台帳からの調査資料。
大阪市に関しては、平成10年度すなわち平成11年3月31日現在のデータ。

平成10年10月1日現在	0～4歳	5～9歳	10～14歳	0～14歳：計	参照 全人口	(外国人を含む)
大阪府	429,000	406,000	455,000	1,290,000	8,557,000	8,804,000
大阪市（尚、外国人は除く）	112,426	101,198	109,083	322,707	2,472,294	2,590,374
吹田市	17,174	16,061	17,550	50,785	338,332	
豊中市	18,242	17,985	20,028	56,255	390,572	
箕面市	5,566	6,000	6,985	18,551	122,911	124,619
河内長野市	5,802	6,285	7,483	19,570	122,909	
泉佐野市	5,365	4,890	4,924	15,179	95,712	96,452
和泉市	10,106	9,896	10,049	30,051	171,040	
柏原市	4,337	4,143	4,432	12,912	80,006	
富田林市	6,921	7,209	7,601	21,731	124,982	125,867
枚方市	20,344	19,954	22,479	62,777	405,879	
羽曳野市	6,137	5,944	6,483	18,564	119,089	
池田市	4,407	4,523	5,204	14,134	101,579	
松原市	7,058	6,417	6,633	20,108	134,488	
堺市	38,529	36,801	39,890	115,220	789,500	796,675
兵庫県				839,000	5,461,000	
尼崎市	22,449	20,402	21,756	64,607	478,330	
芦屋市				10,296	80,783	82,430
西宮市				60,687	415,789	
伊丹市				30,506	192,696	

表2.

大阪府及び兵庫県に関しては推計資料。
その他の市については、住民台帳からの調査資料。
大阪市に関しては、平成11年3月31日現在のデータ。
大阪府、兵庫県に関しては外国人を含む全人口以外は平成10年10月1日現在の推計人口の資料が最も最新。

平成11年10月1日現在	年少人口0～14歳：計	全人口（外国人を含まない）	全人口（外国人を含む）
大阪府 * H10.10.1	1,290,000	8,557,000	8,836,471
大阪府 * H11.3.31	322,707	2,472,294	2,590,374
吹田市	50,933	340,350	344,939
豊中市	55,697	390,868	395,631
箕面市	18,182	122,691	124,400
河内長野市	19,206	122,895	123,452
泉佐野市	15,356	96,514	97,226
和泉市	30,136	171,653	173,703
柏原市	12,791	78,430	79,683
富田林市	21,731	125,553	126,431
枚方市	61,627	402,126	406,006
羽曳野市	18,477	119,399	120,317
池田市	13,998	100,529	101,717
松原市	19,925	132,461	134,008
堺市	114,002	788,524	799,600
兵庫県 * H10.10.1	839,000	5,461,000	5,549,345
尼崎市	63,645	468,613	475,300
芦屋市	10,367	82,341	83,993
西宮市	62,474	422,060	428,803
伊丹市	30,501	191,588	193,379
宝塚市	31,748	212,623	216,135

対象及び方法

対象

ポリオと鑑別を要する疾患「ギランバレー症候群 Guillain-Barre Syndrome (GBS)、横断性髄膜炎及びその他の急性弛緩性麻痺」で入院した症例を対象疾患とした（15歳以下）。

対象医療機関

大阪大学医学部付属病院及び関連35病院の計36病院（表3）。

方法の説明

関連病院部長会議（平成11年1月11日）において、調査の目的と研究方法について説明した。

事前調査（回顧的調査）：調査依頼状を平成11年1月11日開催の関連病院部長会議で配布し、ポリオ鑑別診断患者調査票（資料1）に平成10年1月1日から同年12月31日の間の上記対象疾患の入院患者の有無及びその臨床事項の記入とその返送を依頼した。

届出（前方視的調査）

大阪大学医学部付属病院及び関連病院35病院に、平成11年1月1日から同年12月31日の間に上記の対象疾患が発生したときに、ポリオ鑑別疾患患者調査票（資料2、頁1）による届け出とウイルス学的検索のための検体採取（資料2、頁2）を依頼した。さらに、平成11年6月25日には関連病院に勤務する小児科医師全員（198名）に調査依頼状（資料3、頁1～2（勤務医）、頁3～4（部長））を送付し、平成11年1月1日から同年12月31日の間に上記の対象疾患が発生したときに、ポリオ鑑別疾患患者発生届（資料2、頁1）による届け出とウイルス学的検索のための検体採取（資料2、頁2）を依頼した。

人口調査

大阪府庁、兵庫県庁、各市役所（19市役所）に電話で問い合わせた。

表3. 阪大小児科関連病院リスト

病院名	所在地
大阪大学医学部付属病院	大阪府吹田市
愛染橋病院	大阪府大阪市
大阪警察病院	大阪府大阪市
大阪船員保険病院	大阪府大阪市
大阪市立総合医療センター	大阪府大阪市
大手前病院	大阪府大阪市
関西労災病院	兵庫県尼崎市
大阪回生病院	大阪府大阪市
大阪厚生年金病院	大阪府大阪市
大阪府立病院	大阪府大阪市
大阪逓信病院（現NTT西日本大阪病院）	大阪府大阪市
近畿中央病院	兵庫県伊丹市
国立大阪病院	大阪府大阪市
国立大阪南病院	大阪府河内長野市
市立池田病院	大阪府池田市
市立伊丹病院	兵庫県伊丹市
市立豊中病院	大阪府豊中市
大阪府立母子保健総合医療センター	大阪府和泉市
県立西宮病院	兵庫県西宮市
市立芦屋病院	兵庫県芦屋市
りんくう総合医療センター市立泉佐野病院	大阪府泉佐野市
市立堺病院	大阪府堺市
市立吹田市民病院	大阪府吹田市
日生病院	大阪府大阪市
府立羽曳野病院	大阪府羽曳野市
箕面市立病院	大阪府箕面市
市立柏原病院	大阪府柏原市
ベルランド総合病院	大阪府堺市
阪南中央病院	大阪府松原市
明和病院	兵庫県西宮市
淀川キリスト教病院	大阪府大阪市
PL病院	大阪府富田林市
ボバース記念病院	大阪府大阪市
長堀病院	大阪府大阪市
東香里病院	大阪府枚方市
宝塚第一病院	兵庫県宝塚市

ウイルス分離

本研究班所定の方法で採取、搬送された2回の糞便材料より大阪市環境科学研究所においてウイルス分離を行った。ウイルス分離にはポリオウイルスレセプター遺伝子を発現しているマウス細胞であるL20B細胞を使用した。

結果

事前調査（回顧的調査）（表4）

調査を依頼した大阪大学医学部付属病院及び関連病院35病院の計36病院すべてから協力の回答を得た。平成10年1月1日から同年12月31日の間に関連病院で入院治療を受けたポリオと鑑別を要する疾患（15歳以下）の症例を経験した病院は11病院19例であった。その19例の内訳は、GBS 8例、急性散在性脳脊髄炎2例、Todd麻痺2例、Bell麻痺1例、脊髄腫瘍1例、RIND（Reversible Ischemic Neurological Deficit）1例、脳梗塞1例、単神経根炎1例、前脊髄動脈症候群1例、横断性脊髄炎1例であった。（表4）

平成10年に関しては、小児のポリオと鑑別を要する疾患の年間頻度は、人口10万対0.29、年少人口10万対2.01であった。疾患別には人口10万対GBS 0.12及びその他の疾患0.17であり、年少人口10万対GBS 0.85、その他の疾患1.16であった。（表5～7）

届出（前方視的調査）（表8）

平成11年に関してはGBS 5例、Fisher症候群2例、急性散在性脳脊髄炎2例、薬剤性麻痺1例、Todd麻痺5例、多発性神経炎1例、末消神経障害1例の計17例届け出があった。平成12年に関しては1月から3月までの3カ月間に脊髄炎1例、Todd麻痺1例の計2例届け出があった。糞便より大阪市環境科学研究所においてウイルス分離を行ったが、1例のみコクサッキーB4型ウイルスが分離された以外いずれもウイルス分離は陰性で、ポリオウイルスが分離された患者は存在しなかった。（表8）

平成11年に関しては、小児のポリオと鑑別を要する疾患の年間頻度は、人口10万対0.25、年少人口10万対1.75であった。疾患別には人口10万対GBS 0.07、及びその他の疾患0.18であり、年少人口10万対GBS 0.51、その他の疾患1.23であった。平成12年1月から3つきまでに報告のあった2例を加えて平均年間頻度を求めると、年間平均報告数15.2名、GBS 4.0名及びその他の疾患11.2名であった。人口10万対に換算すると0.22、年少人口10万対1.56であった。疾患別には人口10万対GBS 0.05、及びその他の疾患0.41であり、年少人口10万対GBS 0.41、その他の疾患1.15であった。（表5～7）

考察と今後の計画

阪大小児科関連病院は、大阪府、兵庫県に存在し、関連病院の所属する市の年少人口は平成10年944,640人、平成11年は関連病院が宝塚市に増えた事により対象年少人口の増加が認められ、973,503人であった。回顧的調査により平成10年には1年間に19例のポリオと鑑別を要する疾患が発生しており、平成11年の調査では17例の患者発生が認められた。平成11年以降については、できるだけ入院早期に2回、便の採取を施行しポリオウイルスに焦点を当ててウイルス分離を施行したが、コクサッキーウイルスが1例で分離されたものの、ポリオウイルスは1例も分離されなかった。平成12年の調査では、1月から3月までに2例の患者発生が認められた。この2症例に関しても平成11年と同様のウイルス分離を施行したが、ポリオウイルスを含めいずれのウイルスも分離されなかった。

ポリオ根絶に向けて国内の状況を把握するこの研究は、医師のポリオに対する認識を常に高めておくという点に関して困難を感じた。その理由は、小児科医、特にポリオ患者を診たことがない若い世代の医師のポリオに対する認識の低さにも起因すると考えられる。

平成12年1月、中国においてインドからの野生株ポリオの持ち込みによる患者発生が報告されている。交通事情が発達した現在、患者発生が続いている国が存在する中での根絶宣言の困難さを痛感した。

表4. ポリオ鑑別診断患者調査票（平成10年）

番号	病院名	担当医師	患者名	発症時年月齢	性	入院年月日	退院年月日	診断名	病原名	予後	ポリオワクチン暦
1	愛染橋病院	川本豊	KS	9歳4ケ月	男	1998.4.21	1998.5.9	Bell麻痺（右）	不明	軽快	2回済み（月日不明）
2	大阪警察病院	尾上幸子	NT	3歳1ケ月	男	1998.7.23	12998.7.24	Todd麻痺	不明	軽快	未
3	大阪市立総合医療センター	塩見正司	KA	5歳3ケ月	男	1997.10.28	1998.1.14	脊髄腫瘍	不明	死亡	有り？
4	大阪市立総合医療センター	塩見正司	SY	6歳11ケ月	男	1997.11.25	1998.1.14	ギランバレー症候群	不明	全治	有り？
5	大阪市立総合医療センター	塩見正司	MJ	12歳3ケ月	男	1998.1.5	1998.2.13	急性散在性脳脊髄炎	不明	全治	有り？
6	大阪市立総合医療センター	塩見正司	UY	1歳2ケ月	男	1998.4.4	1998.5.14	急性散在性脳脊髄炎	不明	軽快	有り？
7	大阪大学医学部付属病院	岡田伸太郎	OA	17歳	女	1998.2.17	1998.3.31	RIND	不明	軽快	未
8	大阪大学医学部付属病院	岡田伸太郎	SY	4歳	女	1998.3.4	1998.3.21	脳梗塞	不明	痙性右半身不全麻痺を残す。	未
9	大阪大学医学部付属病院	岡田伸太郎	FY	3歳	女	1998.3.18	1998.6.11	ギランバレー症候群	不明	軽快	1995.5.10、1995.10.31
10	大阪大学医学部付属病院	岡田伸太郎	HM	10歳	女	1998.3.23	1998.4.8	ギランバレー症候群	不明	軽快	1988.4.7、1988.10.26
11	大阪大学医学部付属病院	岡田伸太郎	KK	3歳	男	1998.12.22	1999.5.6	Todd麻痺	不明	軽快	1回済み（2歳頃）
12	関西労災病院	池田輝生	RI	9歳1ケ月	女	1997.8.20	1998.2.28	ギランバレー症候群	不明（C.jejuni疑い）	後遺症（生活に支障あり）	済み（月日不明）
13	近畿中央病院	清水一男	SS	5歳1ケ月	女	1998.9.10	1998.10.23	単神経根炎	不明	後遺症有り	1993.11.2、1994.5.17
14	市立泉佐野病院	丹羽久雄	YI	10歳8ケ月	男	1998.6.1	1998.6.4	ギランバレー症候群	不明	軽快	済み（月日不明）
15	市立吹田市民病院	松崎香士	KT	7歳0ケ月	女	1998.6.1	1998.6.16	前脊髄動脈症候群	不明	軽快	1990.10.17、1992.10.20
16	市立豊中病院	永井利三郎	NM	2歳1ケ月	女	1998.9.16	1998.10.9	ギランバレー症候群	不明	軽快	済み（月日不明）
17	市立豊中病院	永井利三郎	RS	4歳	男	1998.12.23	1999.1.20	ギランバレー症候群	水痘	軽快	済み（月日不明）
18	箕面市立病院	山本威久	KH	12歳9ケ月	男	1998.11.16	1999.2.26	ギランバレー症候群	不明	軽快	4回？接種（月日不明）
19	PL病院	加藤伴親	MM	4歳3ケ月	女	1998.10.15	1998.10.19	横断性脊髄炎	不明	後遺症（生活に支障あり）	2回済み（月日不明）

1	大阪回生病院	中川喜美子	症例無し	9	国立大阪南病院	泉谷徳男	症例無し	18	日生病院	池原千衣子	症例無し
2	大阪厚生年金病院	田川哲三	症例無し	10	国立大阪病院	多和昭雄	症例無し	19	阪南中央病院	中田成慶	症例無し
3	大阪船員保険病院	島純子	症例無し	11	市立芦屋病院	田平公子	症例無し	20	ベルランド総合病院	大島利夫	症例無し
4	大阪逓信病院	今石秀則	症例無し	12	市立池田病院	牧一郎	症例無し	21	ボバース記念病院	荒井洋	症例無し
5	大阪府立羽曳野病院	豊島協一郎	症例無し	13	市立伊丹病院	有田耕司	症例無し	22	明和病院	藤波彰	症例無し
6	大阪府立病院	納谷保子	症例無し	14	市立柏原病院	石原重彦	症例無し	23	淀川キリスト教病院	森川嘉郎	症例無し
7	大阪府立母子保健総合医療センター	二木康之	症例無し	15	市立堺病院	橋爪孝雄	症例無し	24	東香里病院	三上泰司	症例無し
				16	宝塚第一病院	阪田まり子	症例無し				
8	大手前病院	泉裕	症例無し	17	長堀病院	中室真弓	症例無し				

表5. ポリオと鑑別を要する疾患の年間頻度

	平成10年	平成11年	平成11年*
人口10万対	0.29	0.25	0.22
年少人口10万対	2.01	1.75	1.56

*平成12年1月から3月報告分を加えて平均年間頻度で計算

表6. ギランバレー症候群の年間頻度

	平成10年	平成11年	平成11年*
人口10万対	0.12	0.07	0.05
年少人口10万対	0.85	0.51	0.41

*平成12年1月から3月報告分を加えて平均年間頻度で計算

表7. ギランバレー症候群以外の疾患でポリオと鑑別を要する疾患の年間頻度

	平成10年	平成11年	平成11年*
人口10万対	0.17	0.18	0.16
年少人口10万対	1.16	1.23	1.15

*平成12年1月から3月報告分を加えて平均年間頻度で計算

表8. ポリオ鑑別診断患者調査票（平成11年1月～平成12年3月）

番号	病院名	担当医師	患者名	発症年齢	性	入院年月日	退院年月日	診断名	麻痺明	予後	ポリオワクチン暦	ウィルス分類
1	市立池田病院	田邊裕司	SK	11歳8カ月	男	1999.4.12	1999.5.10	Fisher症候群	不明	軽快	済み（月日、回数不明）	陰性
2	市立豊中病院	嶋田恵子	KK	7歳11カ月	男	1999.5.20	1999.7.26	ギランバレー症候群	不明	軽快	2回済み（月日不明）	陰性
3	市立柏原病院	赤木幹弘	TK	2歳3カ月	男	1999.5.22	1999.5.27	薬剤性麻痺	薬剤	軽快	1998.4.22（1回）	陰性
4	大阪府立母子保健総合医療センター	鈴木保宏	IS	4歳11カ月	男	1999.6.11	1999.9.14	急性散在性脳脊髄炎（脊髄のみ病変）	不明	軽快	1994.4.25、1994.6.11（2回）	陰性
5	大阪府立病院	山岡完次	MH	11歳2カ月	女	1999.6.23	2000.2.4	ギランバレー症候群	不明	軽快	2回済み（月日不明）	陰性
6	ベルランド総合病院	上野弥奈	TG	0歳10カ月	男	1999.7.2	1999.7.9	Todd麻痺（突発性発疹）	HHV-6 or 7？	軽快	未	陰性
7	市立伊丹病院	窪田恵子	HE	9歳6カ月	女	1999.7.5	1999.7.12	多発性神経炎	不明	後遺症（生活に支障無）	1990.5月、1990.11月（2回）	陰性
8	大阪市立総合医療センター	塩見正司	KH	4歳	男	1999.7.17	1999.8.6	ギランバレー症候群	不明	軽快	2回済み（月日不明）	陰性
9	市立堺病院	榊原理恵	YK	2歳11カ月	女	1999.7.24	1999.8.4	Todd麻痺（左前側脳室周囲cyst）	不明	軽快	不明	陰性
10	市立堺病院	高橋邦彦	SE	4歳1カ月	男	1999.7.26	1999.7.28	Todd麻痺	不明	軽快	2回済み（月日不明）	陰性
11	阪南中央病院	竹本潔	KO	3歳9カ月	男	1999.8.5	1999.8.6	Todd麻痺	不明	軽快	1996.4.4、1997.4.21（2回）	陰性
12	大阪市立総合医療センター	塩見正司	MN	11歳	女	1999.8.30	1999.12.3	ADEMまたは多発性硬化症（頸髄炎）	不明	軽快	1998.4、1988.10	CoxB4型
13	大阪警察病院	西垣敏紀	KT	12歳11カ月	男	1999.9.27	1999.10.21	ギランバレー症候群	不明	軽快	2回済み（月日不明）	陰性
14	淀川キリスト教病院	林振作	KM	7歳11カ月	女	1999.9.30	1999.10.23	ギランバレー症候群	不明	後遺症（生活に支障有）	2回済み（月日不明）	陰性
15	市立伊丹病院	藪田玲子	MT	1歳3カ月	男	1999.10.11	1999.10.15	Todd麻痺（突発性発疹）	HHV-6 or 7？	軽快	1999.春1回済み	陰性
16	大阪厚生年金病院	富田理香	KT	5歳8カ月	男	1999.10.18	1999.12.8	Fisher症候群	不明	軽快	1994.10.7、1995.6.23（2回）	陰性
17	大阪府立母子保健総合医療センター	鈴木保宏	IA	11歳10カ月	女	1999.12.6	1999.12.14	末消神経障害	不明	軽快	1993.4.12、1993.10.20（2回）	陰性
18	大阪市立総合医療センター	外川正生	HH	1歳9カ月	女	2000.1.19	2000.3.16	頸髄～胸髄炎、水痘罹患中	水痘？	後遺症（両上肢麻痺）	1998.10.12、1999.4.14	陰性
19	箕面市立病院	窪田拓生	IH	3歳0カ月	女	2000.3.23	2000.3.27	Todd麻痺	不明	軽快	1回済み	陰性

1	愛染橋病院	症例無し	8	大阪逓信病院（現NTT西日本大阪病院）	症例無し	15	PL病院	症例無し
2	大阪大学医学部附属病院	症例無し	9	大阪府立羽曳野病院	症例無し	16	宝塚第一病院	症例無し
3	関西労災病院	症例無し	10	大阪回生病院	症例無し	17	長堀病院	症例無し
4	近畿中央病院	症例無し	11	大手前病院	症例無し	18	日生病院	症例無し
5	市立泉佐野病院	症例無し	12	国立大阪南病院	症例無し	19	明和病院	症例無し
6	市立吹田市民病院	症例無し	13	国立大阪病院	症例無し	20	東香里病院	症例無し
7	大阪船員保険病院	症例無し	14	市立芦屋病院	症例無し	21	ボバース記念病院	症例無し

厚生省　新興・再興感染症研究事業
「我が国におけるポリオ根絶のための小児急性弛緩性麻痺（AFP）サーベイランスの体制の確立」研究班
―平成11年度　報告書（平成12年5月1日）―
「福岡県ポリオ鑑別診断調査：届出（前方視的）調査」

主任研究者：宮村 達男
分担研究者：植田 浩司（西南女学院大学保健福祉学部）
研究協力者：千々和 勝己（福岡県保健環境研究所　保健科学部　ウイルス課）

はじめに：目的

「西暦2000年までにポリオを世界中から根絶する」WHOの目標達成のため、WHOの要請により、日本ポリオ根絶委員会が設置され、わが国のポリオ根絶の証明のために二つの作業が計画された。すなわち、「国内ポリオ症例ゼロの確認（ポリオ様疾患患者発生動向調査）」と「ポリオの鑑別診断例の中にポリオが紛れ込んでいないことの証明（ポリオ鑑別診断調査）」である。私たちに課されたこの度の研究の目的は、後者、すなわち、「ポリオ鑑別診断調査」を福岡県において行うことである。

私たちは平成10年度の回顧的調査の結果を中間報告として報告した［平成10年度厚生科学研究費補助金（新興・再興感染症研究事業）感染症発生動向調査等に関する研究（わが国におけるポリオ根絶宣言のための小児AFPサーベイランスの体制の確立）研究報告書］（以下平成10年度研究報告書）。平成11年度は前方視的調査および確認のために行った回顧的調査の結果を平成10年度調査と対比して報告し、さらに福岡県地区の住民のポリオ血清疫学調査についても報告する。

疫学的背景

平成11年3月現在の福岡県の人口は4,999,446人であり、年少人口（0～14歳人口）は767,054人であった（福岡県企画振興部調査統計課：平成7年10月1日国勢調査よりの推計）。

平成10年度の事前調査（回顧的調査）による福岡県内54病院全病院（対象医療機関表1）から報告された平成10年1月1日から同年12月31日の間の15歳以下の小児のポリオ鑑別疾患症例は7病院より報告された9例であった。9例の内訳はギラン・バレー症候群（GBS）5例、横断性脊髄炎1例、myelopathy1例、一過性筋力低下1例、脊髄圧迫腫瘍1例であった（表2）。小児のポリオ鑑別疾患の年間発生頻度は人口10万対0.18、年少人口10万対1.17であった。疾患別には、GBSは人口10万対0.10およびその他0.08であり、年少人口10万対それぞれ0.65および0.52であった。

対象および方法

対象疾患：平成10年度調査と同様に15歳以下のポリオとの鑑別を要する疾患［ギラン・バレー症候群Guillain-Barre syndrome（GBS）、横断性脊髄炎およびその他の急性弛緩性麻痺］を対象疾患とした。

表1．福岡県地区ポリオ鑑別疾患調査対象医療機関および患者報告数

病院名	平成10年	平成11年
市立門司病院	0	0
市立若松病院	0	0
市立戸畑病院	0	0
北九州市立医療センター	0	0
国立小倉病院	0	0
新小倉病院	0	0
小倉記念病院	0	0
九州労災病院	0	0
北九州総合病院	0	0
東和病院	0	0
市立八幡病院	0	0
済生会八幡総合病院	0	0
新日鉄八幡病院	0	0
九州厚生年金病院	1	1（1）
産業医科大学病院	0	0
牧山中央病院	0	1（1）
町立芦屋中央病院	0	0
宗像医師会病院	0	0
宗像水光会総合病院	0	0
北九州津屋崎病院	0	0
国立療養所福岡東病院	1	0
和白病院	1	0
千早病院	0	0
九州大学医学部附属病院	0	1
千鳥橋病院	0	0
浜の町病院	0	0
済生会福岡総合病院	2	0
市立こども病院	0	0
福岡大学病院	2	2（1）
福岡赤十字病院	0	0
九州中央病院	0	0
福岡逓信病院	0	0
福岡大学筑紫病院	0	0
福岡徳州会病院	0	0
国立病院九州医療センター	0	1（1）
国立療養所南福岡病院	0	0
国立九州がんセンター	0	0
福岡青州会病院	0	0
篠栗病院	0	0
筑豊労災病院	0	0
飯塚病院	0	0
かいた町立病院	0	0
糸田町立緑が丘病院	0	0
川崎町立病院	0	0
田川市立病院	0	0
社会保険田川病院	0	0
久留米大学病院	1	0
久留米大学医療センター	0	0
聖マリア病院	0	0
公立八女総合病院	0	0
大牟田市立総合病院	0	0
三井大牟田病院	0	0
米の山病院	1	0
筑後市立病院	0	0
合計	9	6（4）*

*（　）内は、福岡県保健環境研究所においてウイルス分離を行った症例

対象医療機関：平成10年度調査と同じ福岡県内に常勤の小児科医を有する有床の国公私立の54病院の全てを対象とした。

調査方法：対象医療機関に対し、平成11年1月1日－平成12年3月31日の間に上記の対象疾患が発生したときに、ポリオ鑑別疾患患者発生届による届出とウイルス学的検索のための検体採取を平成10年12月末に依頼した（前方視的調査）（福岡県資料：平成10年度研究報告書p49-55）。より正確な調査のため、調査を依頼した医療機関に対し、再三（平成11年4月30日、同年8月21日、平成12年1月5日）、依頼状を発送した。その上、日本小児科学会福岡県地方会および日本小児科医会の学会および会議等の席上などで、機会あるごとに「ポリオ鑑別診断調査」の意義を説明し、その協力の依頼を行った。さらに、平成12年1月5日の依頼の際には、平成11年1月1日－同年12月末日の対象疾患の発生の確認のため、前年と同様の回顧的調査を行った［福岡県資料（平成10年度研究報告書p49-55）およびその一部を修正した平成11年度福岡県地区資料1-5］。

ウイルス分離：本研究班所定の方法で採取、搬送された2回の糞便材料より福岡県保健環境研究所においてウイルス分離を行った。

付：福岡県地区の住民のポリオ血清疫学調査：1996年に九州大学医学部付属病院において採取保存された1～85歳の315検体の血清のポリオ中和抗体価を、国立感染症研究所より分与された抗原（1-3型）を用いて、伝染病流行予測調査検査術式により測定した。≧1:4を抗体陽性とした。

結果

平成11年1月1日より平成12年3月31日の間に、福岡県地区におけるポリオ鑑別疾患患者発生届（前方視的調査）により、報告され、ウイルス学的検索のための検体採取が行われた症例は4例、その内訳は急性片麻痺（最終診断：反復性片麻痺）、急性四肢麻痺（最終診断：急性脳炎・筋炎）、脊髄炎（最終診断：急性脊髄炎）および急性麻痺（最終診断：インフルエンザ脳症疑い）各1例であった（表

1～3)。採取された2回の糞便（インフルエンザ脳症の疑いの症例のみ1回）よりウイルス分離を行ったが、全例陰性であった（表3)。

確認のための回顧的調査により、上記の4例のほかに両下肢不全麻痺1例およびGBS 1例の計2例（表2および表3の参考症例）が加わり、合計6例になった。この2例の参考症例のうち、両下肢不全麻痺の症例は「ポリオ様疾患患者発生動向調査」として報告された症例であり、福岡市保健環境研究所において糞便よりコクサッキーウイルスA2が分離されており、GBSの1例のウイルス分離のための糞便材料は採取されなかった。

福岡県地区におけるポリオ鑑別疾患患者発生届は平成10年9例（GBS 5例、その他4例）に対し、

表2. 福岡県地区ポリオ鑑別疾患（回顧的調査）の報告症例

病院名	年齢	性	入院月日	退院月日	診断名	予後	ポリオワクチン歴
米の山病院	12歳	男	平成10.3.4	平成10.3.24	ギラン・バレー症候群	軽快	2回以上
九州厚生年金病院	14歳	男	平成10.3.31	平成10.4.20	ギラン・バレー症	軽快	2回以上
福岡大学病院	15歳	男	平成10.4.9	平成10.11.10	ギラン・バレー症	後遺症あり	2回以上
福岡大学病院	0歳10月	男	平成10.4.25	平成10.6.10	myelopathy	後遺症あり	なし
福岡市立こども病院	4歳8月	女	平成10.5.7	平成10.7.8	横断性脊髄炎	後遺症あり	2回以上
和白病院	1歳9月	女	平成10.6.1	平成10.6.25	ギラン・バレー症候群	軽快	2回以上
国立療養所福岡東病院	5歳	男	平成10.6.23	平成10.6.26	一過性筋力低下	軽快	不明
久留米大学病院	0歳4月	男	平成10.8.3		脊髄圧迫腫瘍	後遺症あり	記載なし
福岡市立こども病院	2歳11月	男	平成10.12.1	平成10.12.17	ギラン・バレー症	軽快	2回以上
*牧山中央病院	3歳8月	男	平成10.12.30		反復性片麻痺	軽快	2回以上
*九州厚生年金病院	14歳	女	平成11.1.20	平成11.6.30	急性脳炎・筋炎	後遺症あり	2回以上
*福岡大学病院	4歳2月	男	平成11.6.19	平成11.7.14	急性脊髄炎	軽快	2回以上
福岡大学病院	8歳5月	男	平成11.8.17	平成11.10.1	ギラン・バレー症	軽快	2回以上
九州大学病院	1歳4月	女	平成11.11.24	平成11.12.2	両下肢不全麻痺	軽快	1回
*国立病院九州医療センター	2歳9月	女	平成12.12.26	平成12.1.7	インフルエンザ脳症疑い	軽快	2回以上

* 福岡県保健環境研究所においてウイルス分離を行った症例

表3. 福岡県地区ポリオ鑑別疾患届出（前方視調査）の報告症例からのウイルス分離結果

患者番号	病院名	年齢	性別	入院時診断	最終診断	検体採取年月日	検体	ウイルス分離結果[1]
FP-1	牧山中央病院	3歳	男	急性片麻痺	反復性片麻痺	平成10.12.30	便	陰性
						平成11.1.4	便	陰性
FP-2	九州厚生年金病院	14歳	女	急性四肢麻痺	急性脳炎・筋炎	平成11.1.20	便	陰性
						平成11.1.26	便	陰性
FP-3	福岡大学病院	4歳	男	脊髄炎	急性脊髄炎	平成11.7.8	便	陰性
						平成11.7.10	便	陰性
FP-4	国立病院九州医療センター	2歳	女	急性麻痺	インフルエンザ脳症疑い	平成11.12.28	便	陰性
参考症例[2]	九州大学附属病院	1歳	女	急性下肢麻痺	両下肢不全麻痺	平成11.11.29	便	Cox.A2[3]
参考症例[2]	福岡大学病院	8歳	男	急性弛緩性麻痺	ギラン・バレー症候群	検体採取なし		

1) ウイルス分離には、L20B、RD、HEp2細胞を用いた。
2) 参考症例は平成11年ポリオ鑑別疾患患者の回顧的確認調査により報告された症例である。
3) 福岡市保健環境研究所において分離が行われた。

平成11年は5病院より報告された6例（GBS 1例、その他5例）であった。平成10年の人口10万対ポリオ鑑別疾患患者頻度0.18（GBS 0.10、その他0.08）であったのに対し、平成11年度はそれぞれ0.12（0.02、0.10）であった。平成10年の年少人口10万対ポリオ鑑別疾患患者頻度1.17（GBS 0.65、その他0.52）であったのに対し、平成11年はそれぞれ0.78（0.13、0.65）であった。（表4）

付：福岡県地区（福岡市）における住民のポリオ血清疫学調査の結果を表5および図1に示す。11～30歳の年齢群の3型の抗体保有率を除き、全年齢層、1、2、3型ともに、80%以上の抗体保有率を示した（表5、図1）。

考察とまとめ

平成11年「福岡県ポリオ鑑別診断調査：届出（前方視的）調査」において4例、確認のための回顧的調査により、2例が追加され、福岡県地区のポリオ鑑別疾患患者の発生は6例（GBS 1例、その他5例）であった。平成10年の9例（GBS 5例、その他4例）に比し、3例少なかったが、これは年により発生数に変動のあるGBSの発生が平成11年は少なかったことによると考えられる。福岡県地区のポリオ鑑別疾患患者発生頻度は、平成10年人口10万対0.18（年少人口10万対1.17）であったのに対し、平成11年は0.12（0.78）であった。

平成11年に発生した6例のウイルス分離成績は、福岡県保健環境研究所で検討した4例の糞便からのポリオウイルスの分離は陰性であり、福岡市保健環境研究所で検討した1例からは、ポリオウイルスは分離されなかったが、コクサッキーウイルスA2が分離され（「ポリオ様疾患患者発生動向調査」として届出された症例）、残りの1例からはウイルス分離は行われなかった。

ポリオ血清疫学調査では、これまでの調査と同様、福岡県地区においても、11～30歳の年齢群の3型のみの抗体保有率が低かった。

表4. 福岡県地区ポリオ鑑別疾患（回顧的調査）の発生頻度

ポリオ鑑別疾患診断名	平成11年			平成12年		
	例数	（人口10万対）	（年少人口10万対）	例数	（人口10万対）	（年少人口10万対）
ギラン・バレー症候群	5	0.10	0.65	1	0.02	0.13
その他	4	0.08	0.52	5	0.10	0.65
計	9	0.18	1.17	6	0.12	0.78

福岡県人口4,999,446人、年少人口（0～14歳人口）767,054人（福岡県企画振興部調査統計課：平成7年10月1日国勢調査よりの推計）

表5. 福岡県地区年齢層別ポリオ中和抗体保有状況

年齢層	1型	2型	3型
0～5	14/19 (74)	15/19 (79)	12/19 (63)
6～10	16/19 (84)	17/19 (89)	14/19 (74)
11～15	16/20 (80)	20/20 (100)	9/20 (45)
16～20	17/20 (85)	18/20 (90)	9/20 (45)
21～25	19/20 (95)	20/20 (100)	11/20 (55)
26～30	14/20 (70)	20/20 (100)	12/20 (60)
31～35	19/20 (95)	19/20 (95)	17/20 (85)
36～40	18/20 (90)	20/20 (100)	18/20 (90)
41～45	18/19 (95)	19/19 (100)	17/19 (89)
46～50	19/20 (95)	19/20 (95)	18/20 (90)
51～55	18/20 (90)	17/20 (85)	20/20 (100)
56～60	17/19 (89)	19/19 (100)	16/19 (84)
61～65	20/20 (100)	20/20 (100)	19/20 (95)
66～70	19/19 (100)	17/19 (89)	17/19 (89)
71～75	20/20 (100)	20/20 (100)	19/20 (95)
76～	20/20 (100)	20/20 (100)	20/20 (100)
合　計	284/315 (90)	300/315 (95)	248/315 (79)

抗体陽性例数／検査例数（%）

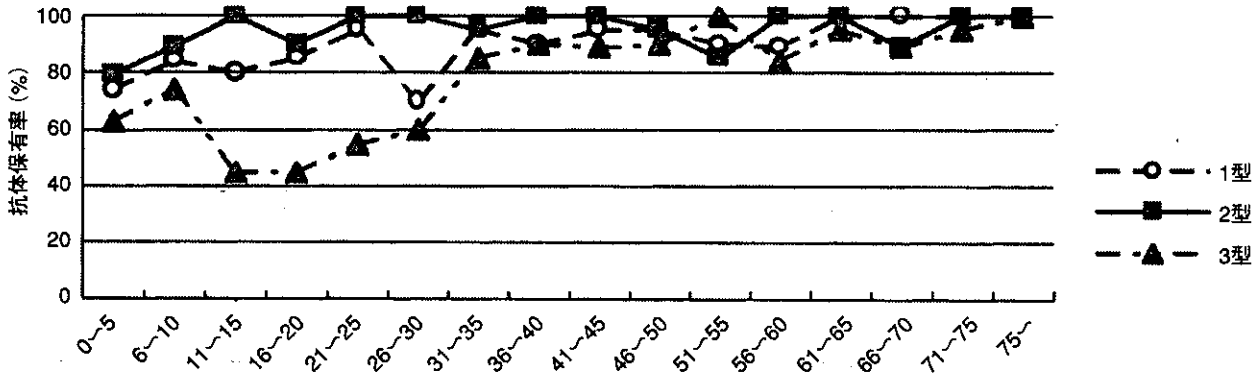

図1. 福岡県地区年齢層別ポリオウイルス中和抗体保有状況

＜平成１１年度福岡県地区資料１＞

各位　　2000年1月5日

再三のお願い

ポリオ根絶証明のためのポリオ鑑別診断調査
"回顧的"および"届出(前方視的調査)のお願い"

謹啓　2000年 新春 明けましておめでとうございます。

今年は「西暦2000年のポリオ根絶(WHO)」の目標達成の年であります。WHOの要請による日本ポリオ根絶委員会は鋭意、その作業を進めております。福岡地域のポリオ鑑別診断調査[事前調査(回顧的調査:平成10年)および届出(前方視的調査:平成11年)]を平成10年12月)にお願い致しましたところ、ご協力をたまわり、心より御礼申しあげます。

事前調査(回顧的調査:平成10年)による福岡県内のポリオの鑑別診断症例は10例(ギランバレー症候群5例、横断性脊髄炎1例、その他の急性弛緩性麻痺4例)でありました。

届出(前方視的調査:平成11年1月1日-12月31日)については 3例の報告をいただきました。全例糞便からのウイルス分離を行いましたが、結果は陰性でありました。

ここで、あらためて 二つのお願いを申しあげます。

15歳以下のポリオの鑑別疾患(ギラン バレー症候群、横断性脊髄炎、その他の急性弛緩性麻痺)の患者について:-

１．平成11年1月1日-同年12月31日までの回顧的調査
[福岡県資料１-(2)(3)]にしたがって平成10年調査と同様にお願い致します。

２．平成12年1月1日-同年 3月31日までの届出(前方視的調査)
[福岡県資料１-(2)(6)(7)]にしたがって平成11年と同様に患者さんが現在入院中でございましたら、また、今後対象疾患の患者さんが発生・入院しました時には至急FAX によるご連絡と糞便採取をお願い申しあげます。

重ね重ね、再三のお願いでまことに恐縮に存じますが、この調査データが日本の資料としてWHOに報告されるものでありますので、何卒 宜しくお願い申しあげます。

御礼、ご報告 と お願いまで、

敬白

厚生省研究班：宮村（達男）班
「新興・再興感染症研究事業　感染症発生動向調査等に関する研究」
(我が国におけるポリオ根絶のための小児ＡＦＰサーベイランスの体制の確立)
福岡地域 班員 植田 浩司(西南女学院大学保健福祉学部)
千々和勝己(福岡県保健環境研究所 保健科学部ウイルス課)

連絡先　千々和勝己　〒818-0135 太宰府市向佐野 39
福岡県保健環境研究所 保健科学部 ウイルス課
TEL 092-921-9945(直通)　FAX 092-928-1203

植田浩司　〒803-0835 北九州市小倉北区 井堀 1-3-5
西南女学院大学保健福祉学部
TEL 093-583-5381(直通)　FAX 093-592-4287

同封:福岡県資料1-(2),(3),(6)および(7)